

新保邦寛先生の御退職に際して

確かに大学というのは、カロリング・ルネサンス以来の、国境を越えた知の翻訳・受容の運動に支えられているのである。今も大学図書館やネット上のアーカイブが我々の前に膨大に存在し、それを渉猟し咀嚼することで様々な精神的冒険が可能である。それは様々な共同体や国の境界を飛び越えるものだし、いまや人間自体も比較的容易に移動できるかみえる。しかし、我々がどんなに様々なアーカイブや境界を跨ぎ越しても、大学の意義は、そこが真に知的な人間との対話に拘束される空間であるかどうかにかかっている。そしてその対話のためには、「死の修練」(ソクラテス)を強いる師が必要である。師がいなければ、我々は知や他の学徒をひとしなみに参照物としか見ず、業績を重ねる自らをいつの間にか権威と思い込むだけである。我々が筑波大学の大学院にやってきた頃、大学や学会は急速にそのような対話の場であることをやめていったようにみえた。

我々にとって、残るは、師の存在のみであった。新保邦寛先生の論文は、無言のうち、容易な論文を量産することを我々に禁じた。先生の論文は、執筆者自らにおける自明の理を常にひっくり返しながら進む必要を迫るものだったからだ。勢い、学会や先行研究の強いる「同調圧力」に屈することも許さなかった。のみならず、先生の指導は、大学での教育が論文と同じような誠実さと密度で行われなければならないことを実践するものだった。いまの大学や教育現場などにおいて、このような姿勢がいかに強い胆力が必要とし、心身をすり減らすものであるのか、我々は日々実感させられている。研究者としての困難はもちろんあるが、教育者としての立場はよりやっかいなものになってきている。もとより、大学や国家が教員や大学院生を「業績生産機構」としてしか扱わなくても、「文学」を志す人間の書くものに、「ボヴァリー夫人は私だ」(フロバール)という言葉が当てはまらないものなどあるであろうか。先生が、我々の抱えるかような「私」のあれこれに直面して、可能な限り教育的で人間的な態度をとり続けたことを我々は知っている。それは驚異的なことである。大概の教員はたぶんそう

ではないのだから。なぜそれが先生に可能であったのであろうか。それはおそらく、先生が、我々に向けてさえ文学者であることをやめなかつたからである。

先生は、著書『独歩と藤村——明治三十年代文学のコスモロジー』（有精堂）の「あとがき」で、自らを「虫屋」に喩え、「文学」を排除して、代わりにただ「学」としての自立を図ろうとする「研究の世界を論難している。確かに、先生の論文や授業のなかの文学作品は、まるで小茂田青樹の美しい『虫魚画巻』のようにみえないことはなかつた。一方、先生の眼には、我々が、もつと珍妙な様態をさらす虫のように映っていた気がする。ファールは、まずは応援も呼ばずひたすら一人で糞団子を後ろ足で抱えて後ずさってゆくスカラベ・サクレの世界に、愛情でも冷笑でも客観的でもない、それこそ文学的としかいいようのないまなざしを向けていた。ファールや先生にとつて、そんな世界は、大学や「学」の世界より広がった。私は、大学院に入学した当時、学部時代に得た資料とドイツ観念論や何やらの図式で頭をいっぱいにし、スカラベ・サクレはもちろん、人間の姿もテキストの姿もストレスであった。先生が、そんな私に対し、民俗学や虫の話をし、「世界に出る」と叱咤したことを懐かしく思い出す。

我々が今書いていることはまだ、たぶん、先生の示唆する「世界」に届いていない。にもかかわらず、我々が自らが育つた『稿本近代文学』に参集して執筆するのは、先生の教育がいかに大きかつたかを自己確認するためであるが、何よりも、我々がこれからいかに「文学」研究を続けられるかを内省するためでもある。大学や人文科学が制度として崩壊するなかでもそれが可能であることは、先生の存在が証明しているからである。

平成二十七年十二月

渡邊 史郎